

長期生存するがんサバイバーの自己認識についての検討

－ がん体験および他者とのかかわりに焦点をあてて－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
大森 美恵

本研究の目的は、長期生存するがんサバイバーが、がん体験と他者とのかかわりを通し、自己をどのように認識して、がんと共存しているのかを明らかにすることである。協力者は、がんの告知を受け、手術治療を行い、予後良好に長期生存する成人女性8名で、半構造化面接を行い、質的帰納的に分析をした。その結果、長期生存するがんサバイバーは、がん体験を通し【がんの恐怖にとらわれた私】【がんに負けないようにする私】【前向きに生きようとする私】を認識して、がんの影響に対処し、【悟りの境地を知る私】【がん体験を通して成長したと感じる私】を成していくこと、他者とのかかわりで【他者との絆の実感】から、人とのつながりに支えられていることが明らかとなった。これらは、先行研究の知見を追認した結果であった。しかし、がんの影響に対処する過程で、対立した認識が葛藤している可能性が示唆された。それは、【がんの恐怖にとらわれた私】と【がんに負けないようにする私】【前向きに生きようとする私】、【他者との絆の実感】と【他者にわかってもらえないつらさ】【身近な人に心配をかけたくない気持ち】の認識であった。長期生存するがんサバイバーは、がんに罹っても、がんに負けないように、前向きに生きようとする自己を認識し、他者との絆の実感を支えに、他者にわかってもらえないつらさや心配をかけたくないという認識に折り合いをつけていることが明らかとなった。